

第1回 本を楽しむ「調べ遊び」

「調べ遊び」。島根県松江市立揖屋小学校の図書館では最近、先生たちがこう呼ぶ遊びが、日常の光景になっている。子どもたちが休み時間や放課後に、友だちと本や資料を探しては、何やら調べて面白がっているのだ。

国語で「ビーバーの大工事」という文を読めば、「もっと知りたい」と図鑑や百科事典で調べ、模造紙にまとめて教室に貼る。パンフレットの作り方を習えば、家で「家族紹介」を作ってくる。友だちと白地図に県名を書いたり、新聞を作ったり。「子どもたちの反応がすごくいい」と学校司書の門脇久美子さん(52)。

「学校図書館を教育の中心に据える」。旧東出雲町(現・松江市)の音頭取りで、町内の小学校3校、中学校1校のすべてに学校司書が配置されたのは2006年。揖屋小は翌07年、図書館を使った授業の研究を始めた。全学級、週1度の図書の時間は、専任の司書教諭と学校司書に学級担任を加えた3人で担当。教科の調べ学習などでも図書館を活用し、昨年度、図書館を使った授業は630時間を数えた。

『わかった』を『できた』にするのが図書館の使命」と司書教諭の樋野義之教諭(43)。本の分類や配置から、百科事典や図鑑の使い方、文献や資料を引用するルール、発表の仕方まで、年間の「図書館活用指導計画」に沿って繰り返し訓練する。図書館は、全教科を貫く「学び方」を身につける場になっている。

じわり、と成果は表れている。例えば全国学力テストの記述式の応用問題は、以前は多くの子が触ろうとしなかったが、今では無回答が著しく減り、正答率も上昇した。何より子どもたちの「知りたい」という意欲が高まった。

広さは教室の約1・5倍程度。特別恵まれた環境ではないが、約1万2000冊の蔵書に、古くて使えない本は一冊もない。文学や絵本だけでなく、調べ学習に使う本や資料が厳選されている。パンフレットや新聞記事など、テーマ別にファイルされた資料ボックスも大活躍だ。

朝8時、登校時間直後から貸し出しカウンターには長い行列ができる。先生の到着前から並ぶ子は、順番待ちの整理券を持つ。児童数約400人の学校で、1日の貸し出しは約300冊にのぼる。かつては古い本が並び、ひとけがなかった。

調べ学習では、子どもたちは本が探せなかった。手探りでの出発からわずか5年で、全国から視察に来る先進校になった。今年1月、国会議員が視察に来ると聞かや、6年生が「質問の時間を下さい」と申し出た。「なぜ視察に来たのか」「TPPについてどう考えているか」。当日、鋭い質問が次々に飛んだ。

教師たちは口をそろえる。「こんな図書館が当たり前になれば、教育は変わる」(片山圭子) 5月4日読売新聞朝刊



(東京都荒川区立峽田小学校図書館で)

事典・図鑑など活用「調べ学習」

一部の小学校は、学校図書館を活用した「調べ学習」の授業に積極的に取り組んでいる。東京の北東部に位置し、下町にある荒川区立峽田小学校(松崎勝校長、児童403人)を訪ね、3年生を対象とした調べ学習の授業を見学させてもらった。



藤田利江さん

「普段から動物や植物について疑問に思っていることを本を使って調べてみよう」。ボランティアの習の進め方を説明している。神奈川県厚木市内の小学校で司書教諭を5年間務めた藤田さんは現在、区内全小中学校に配置されている学校司書に、本の購入などについてアドバイスしたり、紙飾りや天井からぶら下がり、明るい雰囲気や選り組んでいる。東京の北東部に位置し、下町にある荒川区立峽田小学校(松崎勝校長、児童403人)を訪ね、3年生を対象とした調べ学習の授業を見学させてもらった。

答え見つける喜び 大切

どこについてアドバイスしたり、要請のあった学校に出向いて調べ学習の授業支援にあたったりしている。調べ学習初体験という1組の児童29人が選んだテーマは犬や猫、ハムスター、ヒマワリ、バラなど様々。「知りたいことがこの本に載っていない」「索引を見ても、ページが二つ書いてある。どっちを見ればいいのか」「犬の好きな食べ物」「犬の好きな食べ物は何か」「……。写真中心の図鑑では情報が得られず、言葉の教科書では、辞典や図鑑を利用する「調べ学習」の単元が含まれている。

作業が止まっていた金子心咲さんは、大竹直子さんに勧められて百科事典を広げ、熱心に文字を追う。「知りたいことが見つかった時はうれしかった」と満足そうだった。西川太一郎区長就任後、学校図書館の整備に力を入れる同区では、全小中学校で蔵書数が学校規模に応じて定められている「学校図書館図書標準」を大幅に上回っている。峽田小の図書館も小学生向けの総合百科事典を3セット備えているほか、図鑑や参考書などの参考資料が豊富だ。